

とある科学の刀剣使い(ソードダンサー) S

Shin—メン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園都市……東京都西部を切り開いて作られた大都市である。

そこでは「超能力開発」と云うものが学校のカリキュラムに組み込まれており、総人口230万人の実に約8割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り込んでいる。

紅月詩音は学園都市の治安を預かる風紀委員の長であり、今日も愛刀の『絶影』を腰に携え、着のみ着のまま学校生活を送る。

目次

第1話 刀剣使い（ソードダンサー）S 前編

第1話 刀剣使い（ソードダンサー）S 前編

ここは学園都市、第七学区内のある病院……

詩音は『乱雑解放（ポルターガイスト）事件』で主犯だったテレスティーナによつて、重傷を負わされて入院していた。

詩音の負った傷は、常人なら完治するまでに二ヶ月以上掛かるが、この病院に所属するスーパードクターのカエル顔の医者と詩音自身が持つ異常な回復力により、わずか二週間足らずで退院することになった。

退院前の最後の検査を終わらせた詩音は、自前で用意していたラフな夏服を着る。

「フム、特別大きな異常はなし……相変わらず、凄い回復力だね？」

「お世話になりました。先生……別に普通でしょ？」

「いやいや、異常だよキミの回復力は……でも、退院したからと言ってもまだまだキミも本調子ではない。無理をするとまた病室に逆戻りだ？ 良いかね？」

「そのくらい分かってますよ……じゃあ、僕はこれで失礼します。」

カエル顔の医者に一礼して医務室をあとにした。

「やつと、退院かあ、一応、枝先さんの所にも顔出して行かないと……」

その後、詩音は枝先紮理の病室に行き一声を掛けてから、病院を出る。

病院を出た詩音は、その足でいつものファミレスに向かった。

そこで美琴たち四人と落ち合う予定だ。

ファミレスに着き、店内に入ると、店員に声を掛けられる。

「いらつしやいませ！ 名様でしょうか？」

「えつと……連れの友達がいると……」

詩音は店内を見回したが、美琴たちの姿はまだない。

「と思っただけど、まだ来てないみたいですよ。あと四人来ますので……」

「かしこまりました。では、こちらにどうぞ……」

だ。

不良たちは、手足を拘束され、口には猿ぐつわをされている。彼らも今の状況を把握出来ず、うめき声をあげるだけだ。

「さてと……なぜキミたちがここにいるか、分かるかい？」

怯える不良たち……

詩音は、不良のリーダー各の猿ぐつわを外した。

口が自由になったリーダーは、堰を切ったように暴言を吐く。

「おい……ここはどこだ！ テメエ、許さねえからな！」

「面白いこと言うねえ♪お兄さんたち、この状況を分かってないの？ アンタらは、手足縛られて身動き一つ取れないんだよ？ 僕が圧倒的強者だつてこと分からないの？」

「何だとツ!!? クソガキの分際で、イキがつてんじゃねえぞ！」

「はあ〜」

呆れ果てた様子の詩音は、深いため息を吐き、愛刀『絶影』を抜く。

黒い刀身に、燃え盛る炎を連想させるような赤紫の波紋が特徴的な刃が、月明かりに照らされ妖艶に輝いていた。

「な、何、するつもりだ？」

「え？」

とぼけた表情の詩音は、絶影の切っ先を何のためらいもなく、取り巻き一人の腹に、ゆっくりと突き刺して行く。

絶影はブツッと衣服を突き破り、抵抗もなく皮膚を引き裂き、肉の内側に入ってしまった。

刺された取り巻きは、激痛からもがき苦しみ、より一層大きなうめき声を出す。

他の連中もその聞こえた声に呼応するように声を上げる。

「うるせえぞー！ 黙ってるー！」

詩音が一括すると不良たちは静かになった。

そして、腹を刺された不良は絶命する。

己の末路を察した他の仲間たちは、絶望するしかなく、すすり泣くだけだった。

「さて、お兄さん？ こうなりたくはないだろ？」

「この学校……ほら、宿題の量が膨大でしょう？もう、ウンザリですわ」

「分かるわその気持ち……資料探しかけでも一苦労だもんね？」

「ならば、御坂さんも資料探しか何かしら？」

「え？私は黒子を待つてる間の暇潰し……夏休みの課題はもう終わったわ……」

「えッ!!」

「ですわよね」

「ワタクシだって、その気になれば、このくらい半日でえ……」

負けず嫌いの婚后は愛用の扇子で口を元隠した。

しかし、その拍子に婚后の手から本が滑り落ちる。

「あ……あら、やだ。ワタクシとしたことが……」

「もう大丈夫？」

婚后の落とした本たちを、みんなで集めた。

「ほら〜コッチまで……」

美琴が机の下まで来た本を取ろうと手を伸ばした時に、とある人物に目が行く。

「ゲッ……Σ（・▽・——）」

後ろ姿だがその人物は、常盤台中学の制服に、肩の辺りから2つに分けた蜂蜜色の長い髪、長身痩躯で、蜘蛛の巣に似たレース模様入りのハイソックスと手袋を着用しており、また星のマークが入った高級ブランドのバッグを常に下げていた。

そして、美琴が一番苦手としている人物でもある。

「まあ♪食峰さまですわ♪」

湾内が美琴に続き食峰の存在に気づいた。

「本当ですわ♪派閥の方々を引き連れて……♪」

湾内の言葉に泡浮も、食峰とその取り巻き達に目を向ける。

「さすがは常盤台を代表するレベル5の一人ですわ。」

「そうでしょうか？ワタクシ、あの食峰操祈って方苦手ですわ。なんと言うか？虫が好かなくて……」

憧れの視線を向ける湾内と泡浮とは逆に、婚后光子は不満を吐露し

「ちよつと！人の物を勝手に触らないでくれるツ!!?」

美琴は自分のバックを食峰から、強引に取り戻す。

「やだ〜怖い♪あ、ひよつとして殿方へのプレゼントか何かあ〜?」

「アンタ?もしかして、私にケンカ売ってんのツ!!?」

凄む美琴……険悪な空気が二人を包む。

「まっさか〜♪1対1じゃあ難しいモノ〜♪」

そう言つて食峰は、自身の肩掛けバックからリモコンを取り出し、美琴に向かってボタンを押した。

次の瞬間、美琴の側頭部に電流が流れた。

「イツつうう………」

食峰の能力から、自身の身を守る美琴……しかし、それなりのダメージはあるようだ。

「本当やっかいよね☆電磁バリア☆」

食峰の放つたその言葉に、美琴の堪忍袋の緒が切れてしまう。

「アンタねえーーツ!!」

美琴は机を叩き、勢い良く立ち上がった。

椅子も倒れ、凄い音を発てる。

何事かと他の生徒たちも、二人から目が離せない。

まさしく、一触即発の雰囲気だった。

「でも〜御坂さんをギャフンと言わせる手な r………」

食峰が再び能力を使おうとした時だった。

勢い良くバアン!と図書館の扉が開く。

「御坂さん!やつと見つけた!」

図書館の扉を開けたのはなんと詩音だった。

「え?誰?」

「どうして、こんな所に?」

「お、男よツ!!?」

回りからどよめき上がる。

美琴も戸惑い、食峰も啞然としている。

「御坂さん!みんな待ち合わせ場所で待ってますよ!」

堂々とした態度で、美琴のもとへ歩み寄り、彼女の手を握ると仲間

の所に連れて行こうした。

「ちよっ、詩音！どうしてアンタがここにいるの？」

「なんでって、迎えに来たんだよ？」

次回に続く。。。。